



小さな



桃色

苦労話

zen-aku

ホヅミさんは、おばさんだった。

ここは、千葉の浦安でなかった。

ここは、岡山の浦安だった。コンビニエンスストアだった。

ホヅミさんは、中年のおばさんだった。

アリマさんは、女子大生だった。

アリマさんの通う大学は広島市だけど、今は一時的に休んで岡山市に帰っている。

土曜日のある時間、この店は客が来ない時間があった。

その日、客が来ない時間に、時間が余った。

アリマさんが所在無げになってしまい、「どうしようかな?」と思った。

アリマさんは、つい目の前のおにぎりを突っついた。

おにぎりのてっぺんをつまんで、くるりと回した。

「おにぎりつんつん」

「うわみてた?」

「おにぎりの後ろ、見てごらん」とホヅミさんが言った。「製造者ってところ」

「株式会社さんかくん 岡山市築港..... って、ここのすぐ近くだ」

「めちゃ近いよ。私ね、そこで働いてたんだ。」

「...」

「聞きたい?」ホヅミさんの顔は話す気まんまん。

「えー聞きたい」アリマさんは、話す話題があってほっとした。

* * * ホヅミさんが小さな桃色苦勞話を始めた。 * * *

「はじめはおにぎりを作る担当だったの。アリマさんがね、さっきおにぎりをくるっと回してたけどね、おにぎり工場でもね、あれをやってるの」

「おにぎり工場なの？」

「惣菜パンもつくってる。お弁当も。それでね...」

「大きな回転するテーブルがあってね。いろんな方向を向いた三角おにぎりがくるくる回ってるの。なんででしょう？」

「え？」

「...おにぎりの後ろに貼ってあるシールがね、貼って無かったり、印刷がずれて会社名や住所がはみ出しちゃうとね、問題になっちゃうから」

「しらなかった」

「法律なのかな？問題になっちゃうんだ。」

「そういうことあったんですか？」

「2回あったよ。どっちも出荷前に見つかったけどね。大騒ぎして作り直したんだ。」

「2回とも、見逃した人は同じ人でね、工場長に叱られてやめちゃった。たぶん嫌になったんだね。たくさんの回転おにぎりを見続けるのが。」

「ホヅミさんは嫌にならなかった？」

「なんとか」

ホヅミさんの名札がぽとんと落ちた。

「あっぶね—————！」

ホヅミさんの突然の絶叫に、アリマさんが目をむいた。

「驚いた？ 前の職場でね、『名札を無くした人は、会社からいなくなる』ってジンクスがあつてさ。名札を無くした人がさ、やめるそぶり全然無かったのに、ある日突然辞めちゃうの。こわ。」

「前の職場って、おにぎりの？」

「そう、おにぎりの職場。でね、おにぎりの次に惣菜パンのラインに移ってね...」

「ライン？...」

「ラインていうのは、製造ライン。ロールパンのラインとか、ハンバーガーのラインとか、サンドイッチのラインとか。一つのラインに7・8人かな？一列に並んで、コンベアを流れてくるパンに具材を乗せていくの。」

「面白そう。一度やってみたい。」

「大変だよ。おばさんたちがお互いに『もっと詰めて』とか、『急いで』とかワーワー文句言いながら作ってたよ。とにかく、数をこなすために大忙しなんだよ。」

「そっか」

「そこに一人だけスリランカの留学生の子がいてさ、顔もいいし仕事の筋もよくてはかどるから、その子の取り合いになるんだよ。」

「顔がいい？ もしかして男の子？」

「そうなの、おばさんたちの数時間の疑似恋愛のエジギ。」

「怖いな。盛ってるでしょ。」

「スリランカの子がね、私が名札無くなったときになぐさめてくれたの。でもね、その子が急に来なくなってね、工場長が突然 『お知らせがあります』 って臨時の朝礼があってね、事務所からお金が盗られてその子が捕まったんだって！ ショックだったよ！！」

「...」

「そしたら急に工場で働く気が無くなっちゃってね。やめたんだ。一瞬、名札のジンクスかなって思ったけどね。どうでもいいけどね。あ、アリマさん、あっけにとられてるね。」

「...」

「アリマさん。...アリマさん。」

「あっ、はい。すみません。」

そのとき、お客が来る時間になった。

* * * ホヅミさんの小さな桃色苦勞話が終わった。 * * *

アリマさんはバリバリ働いた、その日。